

次代を担う子どもたちの健康をサポート。 ご家族や地域と連携し、見守っていききたい。

CASE

01

四国こどもとおとなの医療センター

一次から三次救急、発達障害、育児支援など小児医療の幅広いジャンルに取り組んでいます。



四国こどもとおとなの医療センター
研究・教育センター長

近藤 秀治

新生児から幅広く対応する診療体制

四国こどもとおとなの医療センターは、2015年、善通寺病院と香川小児病院が統合して誕生しました。現在は専攻医を含め、約30名の小児科常勤医で成育医療全般を支えています。香川小児病院時代の小児救急と新生児医療を中心としてきた伝統を継承しつつ、幅広い小児医療を提供しています。重症心身障害児（者）病棟が4棟あり、新生児から一貫して対応。小児医療全般をカバーしている点が強みですね。

新生児部門（NICU・GSU）は四国で最初に総合周産期医療センターの指定を受けて以来、40年の歴史があります。かつては香川県が新生児の死亡率ワースト1でしたが、今では死亡率が激減し、新生児科医の数も全国トップクラスです。

新生児に関しては、四国四県の県庁所在地の患者さんを当院がカバーしています。「ポストNICU」という後方支援病棟があり、受け入れ体制が整っています。現在、小児科病棟は3病棟102床で、うち2棟に各10人のポストNICUを設置。NICUで一定期間、診た後はそちらへ移し、長期になれば重症心身障害児（者）病棟へというシステムができあがっています。

現在、子どもが病気で亡くなる事例は、かなり少なくなっています。突然死や不慮の事故、新生

児など一部で亡くなるケースはあるものの、小児学会では「チャイルド・デス・レビュー」といって、死亡事例を1つずつ洗い出し、検討する時代になっています。

育児支援室や児童心療内科を設置

一方、必要性が増しているのが、育児支援です。当院には育児支援対策室が設置され、虐待の問題にも取り組むなど、先進的な活動を行っています。虐待の背景には育児に対する不安や悩みがあり、それをソーシャルワーカーの方と一緒に、定期的に情報交換しています。外来でも育児相談を受け付け、困っている点に対応するほか、管理栄養士による栄養指導、地域の保健師さんなどとも連携してサポートしています。また、虐待やネグレクトなどの可能性を感じた場合には、児童相談所や行政に働きかけて対応や予防を推進しています。

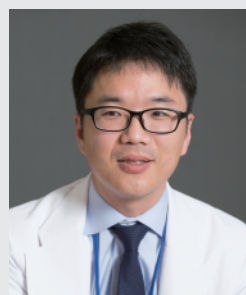
最近の課題である発達障害に関しては、児童精神科と連携した診療を行っています。ADHDや学習障害は、生活面での指導や薬物による治療などのアプローチが中心ですが、それに加えて児童心療内科がある点が当院の特徴です。患者さんと面談して、家庭環境や家族の問題をヒアリングし、子どもにとって暮らしやすい環境づくりをサポートしています。場合によっては学校など教育現場と

指導医の声

専門領域だけでない幅広い視点を。
総合医という意識も大切にしてほしい。

四国こどもとおとなの医療センター 小児科

岡田 隆文



父が小児科医で、当院の前身でもある香川小児病院の官舎で育ちました。子どもを元気にする職業に就いていることに憧れがあり、自分も小児科医の道を選びました。

小児科医は子どもの総合医であり、病気はもちろん、成人になるまでの健康や保健に関するさまざまな問題にアドバイスできる立場でいなければいけないと思っています。研修医は入院してきた子どもに対して、病気が治った時点で治療が終了したととらえがちですが、退院した後の予防的な指導や、集団生活に戻った時の問題まで想像しながら、入院中の診療にあたるのが大切です。

私はサブスペシャリティとして感染症専門医を持っています。研修医時代、白血病の子ど

もを診る機会が多く、抗がん剤治療や移植で免疫が弱い状態になり、血液培養の検査後、抗生物質を投与するケースが少なくありませんでした。NICUでは超低出生体重児の赤ちゃんが立て続けに亡くなり、免疫が未熟な赤ちゃんや治療によって免疫機能が抑えられるお子さんを診て、感染症の知識と治療方法を身につけたいと考えました。

当院は周産期母子医療センターがあり、一次から三次救急まで幅広く学べる環境が整っています。専門領域の研鑽を積むことはもちろん大事ですが、専門だけにこだわらず、総合医というイメージをもって取り組んでほしいですね。私自身は身なりを整えて、忙しい時でも楽しく仕事をするように心がけています。



四国こどもとおとなの医療センター DATA

■所在地

〒765-8501 香川県善通寺市仙遊町2丁目1-1
<http://shikoku-med.jp>

■病床数

689床（一般病床667床／重症心身障害215床を含む、精神22床／児童）

■診療科目

小児科／小児呼吸器内科／小児循環器内科／小児神経内科／新生児内科／小児アレルギー科／小児血液・腫瘍内科／小児腎臓内科／小児内分泌・代謝内科／小児感染症内科／児童心療内科／児童精神科／婦人科（思春期）／産科／周産期内科／小児外科／小児心臓血管外科／小児脳神経外科／小児整形外科／小児形成外科／小児眼科／小児耳鼻いんこう科／小児歯科／内科／心療内科／呼吸器内科／消化器内科／循環器内科／リウマチ科／外科／整形外科／形成外科／脳神経外科／呼吸器外科／心臓血管外科／皮膚科／泌尿器科／眼科／耳鼻いんこう科／乳腺外科／婦人科／不妊治療婦人科／リハビリテーション科／放射線科／麻酔科／救急科／臨床検査科／病理診断科

の調整も行います。

職場の負担軽減にも対応

小児・成育医療に関しては、当院に限らず慢性的に人手不足ですが、一番の問題は、夜間・休日の救急対応でしょう。当院では病院連携医として登録いただいている開業医の先生方に応援をお願いしているほか、当直医の負担を軽減するシフト勤務を導入しています。深夜帯までは2人体制を維持して、片方が外来の担当やサポートにあたれば、ずいぶん楽になりますから。

また、初期研修医に副直で入ってもらっています。オンザジョブでの教育になり、カルテの記入や簡単な処置をお願いできれば、双方にとってのメリットになります。女性医師の出産のケアや産後の復帰にも取り組んでいます。

小児・成育医療の課題に取り組む

小児科は斜陽の診療科でもともと医療費が安く、売上げがあまり伸びないうえ、予防接種や検診で早く病気が見つかり、重篤化しなくなりました。一方、いじめや登校拒否、虐待といった心の問題がクローズアップされています。疾病構造が昔と比べ、大きく変化しています。学習障害や多動などが増え、児童精神科や神経内科と協調しながら診ていく時代になりました。

また、移行医療の問題もあります。治るようになったとはいえ、遺伝子異常やそれに基づく代謝疾患、心疾患、がんの治療などは大人になっても続きます。新生児医療が発展して小さく生まれた場合でも元気に育ち、脳性麻痺や運動障害が残らず、身体的には問題ない場合が多いです。しかし、私は腎臓が専門ですが、10歳前後からたんばく尿が出だし、小さく生まれれば腎臓の糸球体の数が少ないので、成長段階で腎機能が低下してくるという問題が発生します。

ハイリスク児は将来、高血圧や肥満、糖尿病などが出る場合が多く、大人になった時にも普通の人と同じように過ごせるよう、新生児の時から治療に取り組んでいく必要がある。それが今後の新生児医療の課題ですね。新生児から小児科への移行、さらに成人診療科へうまくバトンタッチしていきたいですね。

小児科も今後は保健や教育面が大切になってくるでしょう。生まれてきた子どもの病気を治して大人に育て、次の世代に引き継いでいく。心の問題があれば、それを取り除いて社会で活躍できるようにする。それが小児科本来のあり方です。ご家族や教育機関と連携して、保健・行政・教育と十分コミュニケーションをとって取り組んでいけたらと考えています。



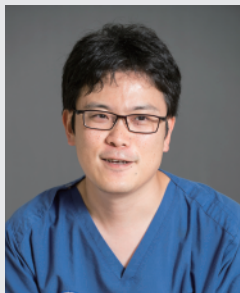
あおいろの丘スタッフステーション（小児病棟）



NICU, GCU



PICU



専攻医の声

**新生児から一般小児科まで
密度の濃い研修ができる点が魅力です。**

四国こどもととなの医療センター 小児科

梅田 真洋

出身地である香川県で、新生児から小児科全般、サブスペシャリティ分野まで幅広く学べること、研修期間を一般小児で1年、NICUで1年と分けられることなどがあり、当院を選びました。コモンな疾患から珍しい疾患まで経験することができ、超未熟児出産も多数取り扱う病院であれば、小児科医としての基礎が十分に身に付くと考えました。

また、当院には児童精神の先生も多数おられるので、心の問題についても院内で対応でき、コンサルトを通じて、いろいろ勉強できます。当院のように小児全般に関わる病院は少ないのではないのでしょうか。県内だけでなく四国各県から患者さんが来られるので症例数も豊富です。ベテランから中堅、レジデントの先生までたくさんの先輩から日々多くのことを学んでいます。

CASE
02

三重中央医療センター

チーム医療で小さな生命を応援。出生時のリスクから成長までをフォローアップ。

「赤ちゃんに優しい病院」に指定

当センターは、1998年に厚生労働省から成育医療の基幹施設に指定されました。2001年には、WHOとユニセフから「赤ちゃんに優しい病院（Baby Friendly Hospital）」に認定されています。これは「母乳育児を成功させるための10か条」を推進している施設を認定するもので、三重県内では唯一の認定施設です。安全で楽なお産をサポートするほか、希望があれば夫の立ち会い分娩に対応しており、産後も分娩直後から完全母同室

で過ごせます。

2003年には総合周産期医療センターに認定され、2004年には「MFICU（母体胎児集中治療管理室）」を開設しました。異常のある妊婦や赤ちゃんへの一貫した管理を行い、安心して出産を迎えられるように24時間専任のスタッフが担当しています。

臨床研究部では、新生児学、発達免疫学、認知・行動科学、生態発達研究、遺伝子疾患研究など、領域を横断する最前線の学際的共同

研究を行っています。母児間の免疫寛容の成立や流早産の要因、新生児の免疫学的特徴を解明し、胎生期から免疫機構の成熟、適応過程を明らかにすること。また、神経・行動学的発達、生態学的適応過程から早期診断と治療法に関する指針を提供し、子どもの心身の健やかな発達を目標に研究を進めてきました。2006年にはユニークな研究内容が評価され、臨床研究部内に三重大学大学院生命医科学専攻病態解明医学講座新生児医学分野が開設されています。



三重中央医療センター
総合周産期母子医療センター 成育診療部長
新生児科医長 臨床研究部 室長

盆野 元紀



三重中央医療センター DATA

■ 所在地
〒514-1101 三重県津市久居明神町2158-5
<http://www.miechuo-hosp.jp>

■ 病床数
486床（一般病床450床、結核30床、感染症6床）

■ 診療科目
内科／精神科／神経内科／呼吸器内科／消化器内科／循環器内科／リウマチ科／小児科／外科／整形外科／脳神経外科／呼吸器外科／歯科・歯科口腔外科／麻酔科／心臓血管外科／皮膚科／泌尿器科／産科／婦人科／眼科／耳鼻咽喉科／リハビリテーション科／放射線科

リスクがもっとも高い新生児

新生児はだれもが通ってくる道ですが、人生でもっとも生命リスクが高い時期です。全出生児の10%は出生時に何らかの助けが必要で、1%は積極的な蘇生と適切な処置がなければ生存しがたいとされています。

現在、日本の新生児死亡率は1.0（出生1000対）と低く、世界一の水準ですが、低出生体重児の増加、ハイリスク児の問題など、新生児医療を巡る状況は複雑で、楽観できる状況ではありません。生命の危機にある赤ちゃんを助け、健康な成長をサポートするのが我々のミッションです。医師だけでなく、看護師や薬剤師、栄養士、リハビリテーションスタッフなどから構成されるチーム医療で取り組んでいます。

新生児救急、NICUを確保

当センターは、三重県の周産期・新生児医療の中核施設としてNICUを中心に、新生児の治療に取り組んでいます。NICUは急性期病床12床と、回復期病床（GGU）18床の合計30床で構成され、年間約300名の入院があります。三重県全域からハイリスク妊婦（妊娠中の母胎または胎児に異常が発見され、分娩時に母児が生命の危険にさらされることが予測される妊婦）が搬送されてきますが、産科で治療・管理されていても、母児の状況によっては出産予定日まで待てず、赤ちゃんを分娩させる必要が発生するケースもあります。

特に、出生体重1500g未満の小さな赤ちゃん（極低出生体重児）は、心肺機能が未熟なまま生まれてきますので、出生後の不安定な呼吸・循環に対して厳重なモニター管理のほか、採血による血液検査やレントゲン検査、超音波エコー検査を頻回に行い、結果に応じた繊細な治療の修正や変更をすることが必須です。中でも生後数日は目が放せません。

年間60～70名の極低出生体重児が入院しますが、多くの赤ちゃんは急性期だけでなく、長期にわたる呼吸・循環器管理が必要で、人工呼吸器の使用は年間のべ2000日を超えています。酸素が中止できない状態（慢性肺疾患）が続くこともあります。慢性期には未熟児網膜症などの合併症に対し、他の診療科の先生による特殊な検査、治

療を要する場合もあり、3カ月を超える入院も珍しくありません。

1000gに満たない小さな赤ちゃんの点滴、呼吸管理は技術的にも非常に微細な作業で、新生児医療におけるトレーニングを十分に積んでいない場合、小児科医であっても対応が困難です。当センターでは厳重な母胎管理による分娩と、出生後の急性期管理により、予後が劇的によくなり、いかにして合併症をゼロにするかを目標に日々診療を行っています。

30年続く新生児救急車「すくすく号」

当院には新生児専門の救急車「すくすく号」があります。30年にわたり、三重県全域を対象に新生児搬送を行ってきました。車中で検査や治療が開始できるよう、超音波診断装置や人工呼吸器を装備しており、当院のNICUで赤ちゃんの状態や生体情報モニターやエコー検査を確認できる伝送システムを構築しています。入院している新生児の約2割は、「すくすく号」で救急搬送された赤ちゃんです。

成育医療と発達評価をサポート

早産や低出生体重で入院した赤ちゃんがNICUを退院した後も健やかに成長していくかどうかを見守り、サポートしていくことも当センターの役割です。そのため、フォローアップ外来で、お子さんの健やかな成育を確認し、発達を評価する作業が周産期医療の質を評価するうえで、最も重要なことだと思っています。

また、小児科医や新生児専門医を目指す若手医師を教育するのも私たちの仕事で、常に研修医を受け入れています。また、新生児医療の向上のため、当センターでは県内NICUの入院実績や新生児搬送の状況を集計しており、その問題点や傾向を分析しています。また、国立病院機構などでの多施設共同研究にも取り組み、新生児に関する基礎研究・臨床研究を実施しています。

生まれたばかりの時期は一生を左右する大事な時期です。赤ちゃんは成人とは異なり、サイズが小さく、状態も急変しやすいので対応が難しく、関わるジャンルも多彩です。多くの方々と連携しながら新生児医療に貢献していきたいと考えています。



新生児集中治療室（NICU）



三重県新生児救急車 すくすく号



すくすく号 内部